

特集1 * 特色ある学校教育

【小学校にテレビ放送施設導入／昭和42年／錦町小】
西三河で初の学校放送が錦町小学校に取り入れられました。



【謄写版とヤスリ】
最初にヤスリの上にもろ紙を載せて鉄筆で字や絵を書いて版を作ります。制版した原紙を印刷機にセットし印刷します。



【産業教育／昭和34年5月／安城北中学校】
小型四輪車、スクーターなどの空運転や、簡単な整備、修理に汗を流す北中生徒。



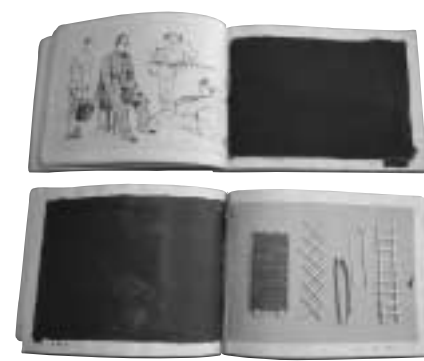
【全校そろってかけあし／昭和37年／高棚小学校】



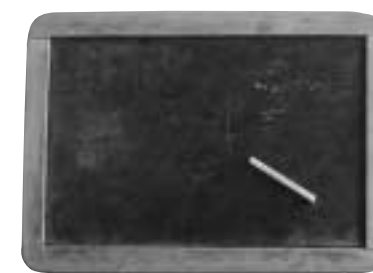
【小学生の朝のラジオ体操／昭和37年7月】



【伊勢湾台風での災害復旧／昭和34年10月／錦町小学校】
荒れ狂った伊勢湾台風で市内の学校も大きな被害を被りました。PTAの父母の手で新しい屋根瓦が次々に運ばれ復旧作業が進みました。



【墨塗り教科書】
終戦後、最初の授業は戦争など関係あるものに墨を塗ることでした。

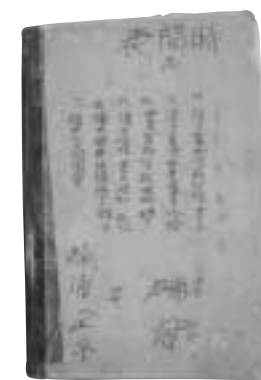


【石盤・石筆】
明治時代の子は石盤に石筆で字を書いていた。大正時代の初めころからノートと鉛筆が広まり、昭和の初めには石盤は学校から姿を消しました。



【大正・昭和の子どもの通学服】
昭和の初めまでは、ほとんどの子が筒袖のかすりの着物でした。

土	金	木	水	火	月	
読方	読方	読方	歴史	算術	算術	1
算術	修身	地理	算術	算術	唱歌	2
図画	体操	書方	唱歌	修身	唱歌	3
	歴史	理科	理科	図画	地理	4
	綴方	体操	綴方	体操	書方	5
						6



【大正時代の時間割】
教材の裏表紙に書かれた尋常小学校5年生の時間表です。

安城の学校 100年のあゆみ

安城の学校 100年のあゆみ

- 明治41(1908)年 安城第一尋常小学校(今の安城中部小学校)ほか創立
- 大正13(1924)年 このころから安城は「日本デンマーク」と呼ばれた
- 昭和10(1935)年 このころ幼児教育は農繁期託児所の形で普及
- 昭和13(1938)年 新美南吉、安城高等女学校(今の安城高校)に赴任
- 昭和20(1945)年 終戦
- 昭和22(1947)年 義務教育制度六・三制に
- 昭和23(1948)年 小学校PTAの発足
- 昭和24(1949)年 ミルク給食始まる
- 昭和27(1952)年 安城南中・北中学校開校
- 昭和34(1959)年 伊勢湾台風で多くの学校が被害に遭つ
- 昭和35(1960)年 初めての鉄筋校舎できる(安城西中学校の開校)
- 昭和38(1963)年 市営錦町プールが完成
- 中学校でミルク給食始まる
- 高度経済成長期の子どもを取り巻く社会問題の一端として「非行問題」

- 若年労働者が「金の卵」と呼ばれた高度経済成長期には、安城の中学生もその半数が卒業とともに就職した。就職率は1960年↓47.9%、2007年↓1.3%
- 昭和40(1965)年 南部給食調理場開設。昭和43年に北部、46年に中部調理場を開設し全小中学校の給食がセンター方式に
- キーワード「かぎっ子」
- 昭和47(1972)年 幼稚園給食実施
- 作手村に野外センターが完成
- 昭和49(1974)年 安城中部小学校区に市内初の交通少年団が誕生
- 昭和50(1975)年 米飯給食開始(月1回)
- 学校施設開放始まる
- 昭和52(1977)年 保育園給食全園開始
- 昭和58(1983)年 茶臼山高原野外センターが完成
- メラミン製3点セット食器、はしによる給食を順次試行
- 平成4(1992)年 学校週5日制試行(毎月第2土曜日休み)
- 平成14(2002)年 完全学校週5日制実施
- 平成15(2003)年 小学校1年生で少人数学級実施
- 平成16(2004)年 小学校2年生で少人数学級実施
- 平成17(2005)年 中学校1年生で少人数学級実施



竹とんぼの飛ばし方をはじめて

桜井小学校では、学区内の老人クラブの皆さんのご協力で、子どもたちが昔の遊びを楽しむ機会があります。この日は35人のお年寄りが、1年生の子どもに、おぼろぎやこま回し、竹とんぼや竹馬などの遊び方を伝授。真剣にお年寄りのやり方を見つめ、手取り足取り教えてもらっているうちに、子どもも楽しそうに遊んでいます。子どもたちは「どの遊びも楽しかったです。家でも遊び道具があったらやってみたいです」と話していました。



桜井風づくり

年生が取り組んでいます。「桜井風の制作を通して、自分の住む地域の文化を知り、地域の人々の伝統を守ろうとする思いを知ること、大人になった将来、心の拠り所ともなるのではないのでしょうか。また、自分が作った物への愛着を感じることもでき、それがもの作りの楽しさを感じる手がかりになれば」と内藤教務主任は話します。

こうした学校行事を通して、子どもたちは地域の文化を知り、地域の人との顔が近づいていきまわって、学校・保護者・地域の人々の連携につながっていくのです。

伝統が育む

桜井小学校

特色ある
安城の教育

地域文学が育む 安城中部小学校

小学4年生は、国語で「こんぎつね」を学習します。しかし、作者新美南吉が安城にゆかりがあることを知っている子は少ないようです。



冬、南吉が安城時代に過ごしたあの店、この店を訪ね、ゆかりのある人々の話を聞きました。

学校では、4年生の子どもたちが南吉の作品を読んだり、「新美南吉に親しむ会」の皆さんから話を聞いたたりして理解を深めています。

秋の学芸会では、記念館のある半田市を訪ねて見聞きした南吉の生い立ちと、「こんぎつね」を組み合わせて、舞台「貝殻の詩」を演じました。冬には、新田町にあった下宿先、安城駅前の店々、詩碑などを見て回って、自分たちの身近な場所にくつものゆかりの地があることを実感したようです。

同校の先生は、「南吉の作品を読み、彼の思いや作品の背景を考えると、おもしろさを感じてもらえれば」。そして安城にかかわった偉人南吉に親しむを感じてもらい、彼の過ごした安城に暮らすことへの喜びを感じてほしい」とその思いを語ります。

学校教育を支える人々①



市老人クラブ連合会会長・加藤正明さん(小川町)

「核家族が多くなり、祖父母と孫が遊ぶ機会も少なくなりました。子どもたちの遊び方も昔とは変わり、友達と遊ぶことも少なくなってきました。テレビゲームやテレビさえもなかった時代、こんな遊びをおじいちゃんやおばあちゃんがしていたんだよと理解してくれ、子どもたちの思い出となってくれればうれしいです」

学校教育を支える人々②

桜井風保存会・天野暢保さん(古井町)



「小学校での、保存会による桜井風作りの指導は5年目。現代人は手先を使うことが少なくなってきましたので、手先の技術を体験できることが魅力の一つ。また風をあげることも自体も技術を要しますが、風揚げを通して、風すなわち自然と上手く付き合う方法・技術を培うこともでき、自然に対する考え方も養われるのではないのでしょうか」



新校舎へ移転後も、桜井小学校の伝統は受け継がれるでしょう。(2月開催「桜井小学校に感謝する会」で校歌を歌う子どもたち)

新美南吉について学んで…

2学期に初めて新美南吉の勉強をした時、童話などの作者とは当然知っていたけど、安城にゆかりがあったなんて、とてもびっくりしました。南吉の安城での下宿先に話を聞きに行き、おもしろいエピソードなどを聞いて「へえ～そんなことがあったんだ」とびっくり。これからも南吉の作品を読みたいと思いました。(安城中部小学校4年 岡田佳奈さん)

南吉は小さいころから大変な生活をしてきたことが、学習してきて一番心に残りました。そんな中、有名な詩や童話を書いたりしたので、南吉はすごいと思いました。南吉の作品には、自分の今の気持ちや人生などが感じられると思います。そんな南吉が一番幸せな時にいたのが安城だったと知って、ぼくはうれしく思います。(安城中部小学校4年 水越勇志くん)



秋、自分たちが見聞きした南吉の生い立ちと、「こんぎつね」を組み合わせた舞台を演じました。



「新美南吉に親しむ会」の人たちから話を聞き、南吉についての理解を深めました。



— 共生で育む —

新田小学校

2011年に小学校高学年での必修化が見込まれる英語。市内唯一の「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業拠点校」である新田小学校では、3〜6年生が「総合的な学習」の一環で週1時間、英語活動に取り組んでいます。安城市に拠点を置き、多くの外国人も参加している「NPO国際理解・英語活動支援バンク」の皆さんがゲストティーチャーとして協力。子どもたちは、ゲームや外国人との交流を通して、英語を楽しく学んでいます。

この日、6年2組のテーマは「買い物しよう」。カードや紙幣

を使って、買い物の場面での会話を練習します。たどたどしくも、はつきりと「Two apples, please. How much?」などと会話。みんな無事に買い物できたようです。このほか新田小学校では、市の姉妹都市であるオーストラリア・ホブソンズベイ市の生徒との交流活動や、ブラジル人学校の生徒との文化交流など、積極的に国際交流活動を実施。実践的な英語活動とあわせて、外国人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする気持ちを育て、国際理解を進めています。



英語で買い物にチャレンジ。単に英語の教科書を読むのではなく、買い物を想定した実践会話です。



学校保健委員会で「世界の料理教室」を開催したり、外国の食生活を聞いたりして、保護者も交えて国際理解と食育を進めています。



ゲストティーチャーと楽しく英語を学んでいます。

— 命の大切さを育む — 安城西中学校

安城西中学校で1月、立志の会が行われました。自分自身の目標を持ち、その目標に向かって頑張ろうという気持ちを育てる機会。これまでも同中学校では「命」にかかわる授業や行事をたびたび行い、「生命の大切さ、生きることの喜び」を目標に掲げています。

した。秋には、赤ちゃんを実際に抱っこなどして触れ合う体験もしており、生と死について、実際に触れ、話を聞くことで「命」の大切さを実感したのです。同校の福田定夫校長は、「共感する心、相手の気持ちを思いやる心を育てることが大切だと考えています。しかし、単に本を読んだり話を聞いたりするだけでは心に残りにません。直接に体験し、いろいろな人と接点を持つなどインパクトのある取り組みを経験してもら

うことで、子どもたちの心に留めてもらえれば、と思います」と語ります。「立志スペシャルイベント」と題して、一人ひとりの夢を書いた短冊に、生徒と先生が春から一緒に育ててきた「命のアサガオ」の種を付け、風船に入れて飛ばしました。大空に舞った風船は、生徒たちの心にずっと刻ま



「私たちの夢、天まで届け」「命のアサガオ、咲きますように」



立志の会では、一人ひとりの夢を書いた紙に、春から育ててきた「命のアサガオ」の種を付け、風船に入れて飛ばしました。



生命のルーツを考える会で、乳児を抱っこし、母親たちとの会話を通して「命」の大切さを感じ取りました。

学校教育を支える人々④

にいがた・骨髄バンクを育てる会 丹後まみこさん

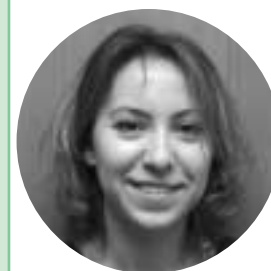
「命のアサガオ」は、白血病のため7歳で亡くなった丹後光祐君が、約3か月間だけ通った小学校で大事に育てていたアサガオです。光祐君の死後、母親の丹後まみこさんが、そのアサガオを育て続け、「アサガオが親善大使となって、命の尊さ、白血病に苦しむ人がいることを知って欲しい」と願い、多くの人々にその種が配られています。昨年の春から、安城西中学校でも生徒たちが育ててきました。



学校教育を支える人々③

NPO国際理解英語活動支援バンク スムル・ケセリさん(トルコ出身/岡崎市在住)

「トルコでは6歳から英語を習います。英語は大好きです。好きになった理由は、先生がステキで、授業の教え方も楽しかったから。私も来日して間がなく、週2時間日本語を教わっているのですが、何事も楽しく、好きでないと、身につけません。だから、私も英語の楽しさを伝えたいと思って、新田小学校などの活動に参加しています」





安城の中学生

安城西中で聞きました

家族愛で健やかに成長

「難しい年ごろだからね」と中学生の母親である私たちは、この台詞をよく口にします。子どもでもあり、少し大人でもある彼らにとって今、家族とはどんな存在なのでしょう。

自分の父母を自慢してくれますか。

「特にないです」とそっけない答えが返ってくるのも覚悟の質問でしたが、清水さんは「母はピアノレッスンの仕事のほかに、音楽講師としても働き始めた。挑戦する姿が立派だ」と母親のスキルアップを褒める、うれしい発言。江



加藤太一さん

川さん、高橋さんの女子2人は、「母とは友達のようにおしゃべりができて、ノリが良くて面白い」とのこと。私は「友達同士のような親子」が現代の特色だと思うのです。一昔前には、母と恋やおしゃれの話題で盛り上がることも、あまりなかったのではないのでしょうか。

君が父母をしかりしたら、どんなことになる？

「親は、自分のことは棚に上げて僕をしかり」という子の意見に全員が「そっそっ。分かる」と納得の様子。どの親御さんにも身に覚えのありそうな具体例が生まれ



阿保圭祐さん

子どもたちや学校を取り巻く環境は、私たち大人が子どものころと、変わってきているように感じます。では今の子どもたちは、何を思い、考えているのでしょうか。その代表として安城西中学校の生徒6人が、市民編集員の取材に応じてくれました。「家族」「本」「夢」をキーワードに中学生の本音に迫ります。

た。「母は『うたた寝してないで早くお風呂に入りなさい』と怒るが、僕が風呂から出ると、自分がうたた寝している」。これはまるで私自身のこと。本当に耳が痛いです。勉強についても、確かに自分のことを棚に上げ、子どもをしかりつけているかも。しかし、一つだけ言い訳すると、親は子どもが自分を超えて成長することを強く願うあまり、自分勝手になってしまうのです。

家族として幸せだと思える瞬間は？

阿保さんは「弟とサッカーをしている時が楽しい」。香西さんも「妹とピアノの連弾をする時心が和む」。みんな、兄弟とのかかわりを大切にしている印象です。4人兄弟の加藤さんは、幼いころからお父さんが彼らの散髪をしているそうです。家族の温かい時間が目に浮かぶようです。

インタビューを終えて。

私たち親は、マニュアル本を頼りに育児をしてきた世代と言われ

ています。常にわが子を人と比較してしまい、おらかな子育てができなかったかもしれません。マスコミで中学生のいじめや裏サイトでの中傷が取りざたされ、親の不安があります。しかし、今日のインタビューで、彼らには、親の大きな愛に育まれ、健やかに成長していることが感じられ、すがすがしい気持ちになりました。

個性がキラリ

中学生は本を読まないとか、夢をもつてないとか、揚げ句の果てには学力が落ちたとか、よくマスコミに取り上げられます。私のまわりの中学生や高校生は、夢ももっていますし、本もよく読んでいます。本当のところ実態はどちらに近いのでしょうか。

先生方のお計らいで、前もって質問事項をお伝えすることもなく先生も交えないで、安城西中学校の生徒たちに本音に近い話を聞く



市民編集員がインタビュー。中学生の本音に迫る。



高橋円佳さん



清水建吾さん



江川ひかりさん



香西成美さん

ことができました。最近読んだ本は？

『12番目の天使』『光とともに』『ホームレス中学生』『リアル鬼ごっこ』『ロベルト・バッジオの自伝』『ゲド戦記』。一人ひとりにどんな内容なの？と問いかけた私に、よくわかるように全員が丁寧に簡潔にストーリーを説明してくれました。読んだ本に関する感想や思いも語ってくれました。「赤ちゃんを育てる苦労がわかり、両親に感謝しました」「人の心の光と闇が書かれています。きれいなさか汚さとか」など、なかなかしっかりとあります。話が弾んでくると次々に最近読んだ本の話になりました。

中学生は実によく本を読んでいます。

将来の夢は？

「いつかハンドボールで全国制覇したい」「安定しているから公務員になりたい」「発展途上国の子どもたちに何か自分にできる手助けをしたい」「雑誌の編集とか雑誌をつくる仕事をしたい」「動物にかかわる仕事をしたい。森が壊されているのをテレビで見て、動物たちが生きていくことのできる環境を考えていきたいと思いました」「今はまだ夢がないので、これから夢を見つけないかと思っています」「いまどきの中学生は、具体的にしっかりと夢をもっています。

インタビューを終えて。

大人である私たちの中学生のころを振り返ってみます。しっかりと将来の夢をもっている子もいたし、漠然としたままの子もいました。本を読む子も読まない子も、学力の高い子も低い子も、運動能力にすぐれた子もそうでない子もいました。大人になると、子どものころの自分をずいぶん立派に過大視してしまうのかもしれない。安城西中学校の2年生と話をしてとても楽しかったと思いと同時に「いまどきの中学生は」なんて十把一からげに言うのはやめるべきだと思いました。

(市民編集員 川畑波津江さん)

編集後記

昨今、学校や子どもを取り巻く社会問題として、いじめ・不登校、子どもにかかわる犯罪、保護者と教師の関係、国際的にみた学力低下などをテレビや新聞紙上で見聞します。就学前の子を持つ私にとっても、子どもたちの将来がどうなるのかと漠然とした不安があるのも事実。決して学校だけの問題ではありませんが…。

今回取材で改めて認識したことは、どの学校も保護者、地域の人々など学校外の人々の協力が欠かせないということ。安城に学校が誕生して以来、学校は地域とともに歩んできました。そして今後も地域に開かれた学校として歩み続けるには、子どもたちの親である私たちが積極的に学校にかかわっていかねければならないと感じました。自分たちの子どもの成長にかかわることなのです。

今回、本紙で紹介した学校は、ほんの一部。各学校では先生、そして地域の人々がさまざまな取り組みを通して、熱心に子どもたちを育てています。4月からは本紙毎月1日号「スクールナビ」で1校ずつ学校を紹介していきますので、ご覧ください。(K)